

# 國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

〔学生懸賞論文発表〕 応募状況と選考過程、選評

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-07-24 キーワード: 作成者: 國學院雜編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001746">https://doi.org/10.57529/0002001746</a>

# 学生懸賞論文発表

## 令和六年度学生懸賞論文の 応募状況と選考過程

國學院雜誌編集委員会

### 第一部門 (本学文学部・神道文化学部・別科在籍者)

#### 佳作

田中 玄太 (文学部史学科四年)

近代における「ふのり」の生産と流通

(〓本誌第一二六巻掲載予定)

#### 佳作

福本 悠人 (神道文化学部神道文化学科三年)

半井真澄に依る祭式研究―祝詞奏上の作法を

中心として―

(〓本誌第一二六巻掲載予定)

### 第二部門

(本学大学院文学研究科・専攻科在籍者)

#### 入選

藤原 慧悟 (文学研究科博士課程後期三年)

中古和歌における話し手の意志をめぐる疑問文

(〓本誌第一二五巻第六号掲載)

#### 入選

北村 規子 (文学研究科博士課程後期三年)

津波の語り―木が表象するもの―

(〓本誌第一二五巻第十号掲載)

(所属・学年は、応募または掲載当時)

本年度の学生懸賞論文の審査対象論文数は、文学部・神道文

化学部学生、別科在籍者を対象とする第一部門が応募三本、大

学院文学研究科・専攻科在籍者の本誌掲載済み論文を対象とす

る第二部門が七本であった。第一部門の活性化が望まれる。

選考過程で基準としているのは、表題と内容の整合性、オリ

ジナリティ、問題提起が明瞭であるか否か、結論と照応してい

るか、論文中の学術上の述語の定義は適切か否か、論証過程に

破綻がないか、当該課題の研究史が十分に踏まえられているか、

日本語の表現は適切か、などであった。また、第二部門につい

ては、本誌掲載までの審査状況についても精査している。応募

する際には、右記の点に留意してほしい。今後さらに、学生懸

賞論文の意義を周知し、意欲的な研究成果が数多く懸賞論文の

審査対象となることを期待したい。

なお、五月十四日に開催された國學院雜誌編集委員会におい

て、査読の結果をふまえて厳正に審査した結果、対象論文二本

を入選、二本を佳作とした。

## 選評

藤原 慧悟 (文学研究科博士課程後期三年、令和六年度)

### 中古和歌における話し手の意志をめぐる疑問文

本論文は、藤原慧悟氏が自身の論文「中古和文における話し手の意志をめぐる疑問文について」(『日本語の研究』一八巻三号、二〇二二、日本語学会)を踏まえ、中古の和歌における「話し手の意志をめぐる疑問文」を詳細に考察したものである。

「話し手の意志をめぐる疑問文」とは、話し手が自らの行為の実行を問題にする疑問文で、中古では文末がⅠ「む」の場合とⅡ「まし」の場合があり、Ⅰは行為実行の決定(行為することとはほぼ決まっています)をどうしようかを問題にする)、Ⅱは未決定(行為するか否かを問題にする)という違いがある。

さらに疑問文を a 肯定疑問文、b 選択疑問文、c 補充疑問文に分けて観察すると、Ⅰ a 「くやくむ」(さらにや訪はむ)は、訪ねて行くことに気持ちか傾き、Ⅱ a 「くやくまし」(宿や借らまし)は、宿を借りるかどうかが決めかねている。Ⅰ b 「くやくむ」(去年とや言はむ)今年とや言はむ)は、去年

と言うか今年と言うか、どちらを選ぶか思案している——なお、Ⅱ b 「くやくまし、くやくまし」はない。Ⅰ c 「不定語くむ」(いづちか行かむ)は、行くことは決まっているがどこへ行くかを考え、Ⅱ c 「不定語くまし」(いづれを梅とわきて折らまし)は、どの枝を折つてよいかわからず折ることを迷っている。また、よく似たⅠ c 「いかにせむ」とⅡ c 「いかにせまし」では、前者がどのような行為をするかを迷うのに対し、後者は行為をするかどうかを迷う。Ⅰ a、Ⅱ c の各文型には、このような整然とした使い分けがある。

ところで、右にはすべての文型について用例を挙げたが、実は散文と和歌では分布が異なり、Ⅰ a とⅠ b は和歌にしか見られない。Ⅰ a の意味は「くむ」という平叙文(さらに訪はむ)に近く、散文ではこちらを用いている。Ⅰ b は補充疑問文(「いつか言はむ)の回答を選択肢の形に絞ったもので(去年とや言はむ)今年とや言はむ)、そもそも和歌でも用例数が少なく、散文にないのは偶然と考えられる。

以上のことが藤原氏の研究によって明らかにされた。本論文は丁寧な用例分析と文法の体系的観点から、先行研究の不備を正し、整合性と妥当性の高い結論を導き出している。散文と和歌に共通する中古の疑問表現の一端を明確に論証し、疑問表現

史研究を大きく前進させたと言える。そのみならず、研究成果は古典作品の用例解釈に益するところも大きい。以上のことから、本論文は『國學院雜誌』学生懸賞論文入選にふさわしいと評される。

北村 規子 (文学研究科博士課程後期三年 令和六年度)  
津波の語り―木が表象するもの―

北村氏の論文は、従来、防災や心理療法を目的として研究されていた「津波の語り」を、沖縄県石垣島、東北地方の三陸海岸で語られる伝承(津波の際に木に上る・木につかまる・木にひっかかるなど)「木に助けられた」という話型を通して、話者や地域社会が何を伝えようとしたのかを、口承文芸研究として考察した視点が評価できる。

特に沖縄県石垣島地域(宮古・八重山両列島)で、一七七一年に発生した「明和の大津波」という江戸時代に起きた過去の大津波に関する語りを、津波発生から約二〇〇年後の口承資料から論じている点が興味深い。具体的には一九八〇年―一九九〇年代に石垣島の島民から聞き取った資料「東アジア民話デー

データベース」と、牧野清『八重山の明和大津波』一九六八年に収録された資料である。両資料からピックアップされた「木に助けられた」という話型の資料を分析している。

北村氏は、「木に助けられた」話が、デイゴ・マツ・アコウ・ヤラブという聖地の木への信仰を通して、津波で失われた島の祭祀(御嶽)や、全壊集落の強制移住にともなうアイデンティティを回復させる「島建て」の物語(津波被害から復興する物語)として、島民に伝承され、機能して来たことを論じている。

一方、東北地方、岩手県・宮城県の三陸海岸で一八九六年に発生した「明治の三陸大津波」についてもグラフ雑誌『風俗画報』を基本資料として「木に助けられた」話を考察している。石垣島の島民の話と違って、『風俗画報』は、津波被害地域を取材した記者によってまとめられた記事によって、被害地域以外の人に津波被害を理解させることが話の目的となっている。石垣島の資料とは話の立ち位置が異なっていると北村氏は指摘する。

また、東北地方で二〇一一年に発生した東日本大震災の被災地を訪れた北村氏は、宮城県気仙沼市で「木に助けられた」話として、群生する樺の木に上って津波から助かった人たちの話を聞いている。気仙沼では、ツバキが地域の原風景、心の拠り

所の木になっていると北村氏は述べているが、気仙沼の語り手の話は、石垣島の「木に助けられた」話と比較すると「島建て」の物語にはなっていない。

東北地方の三陸海岸、津波常襲地帯で語られる「木に助けられた」話という話型の考察は、北村氏の今後の課題と言えるであらう。